

パクス・アメリカーナ後の世界の秩序と日本



NPO法人 関西ミニウイングス
事務局長 山下 正章

1. 世界の秩序の変遷

現在の世界秩序は、大航海時代の16世紀から、欧米の秩序が正しいものとして成立している。16世紀はスペインやポルトガルの時代であり、17世紀はプロテスタント系のオランダ、18世紀は産業革命と金融革命を実現したイングランド、19世紀はブリテン島を連合した大英帝国が世界の秩序を主導してきた。20世紀に入って新興国であったアメリカのグローバリストが台頭し、一時の米ソ冷戦期を経てパクス・アメリカーナが確立した。

しかし、21世紀に入って9.11世界同時テロ事件により、その秩序が崩壊し始め、欧州連合が見直されるに至って、グローバリズムの終焉の兆しがみられる。

2. 世界での多様な「正しさ」

世界に共通する正しさには、①神が決めた正しさ(宗教)、②偉人が決めた正しさ(道徳)、③相手に配慮し自分で決めた正しさ(倫理)、④皆で決めた正しさ(法律)などがある。

神が決めた正しさは、厳密には指導者が神の名のもとに正しいと決めた事項を文書化したものであり、その文書に異議を唱えるものを排斥することにも用いられてきた。宗教は、信じるものであり、思考停止にも繋がる。そういう意味では、イデオロギーの正しさは一神教に通じるものとも言える。一方、②の道徳、③の倫理、④の法律は、多くの人間が思考して構築してきたものである。いわゆる「科学」の範疇の正しさと言える。

3. 日本人の「正しさ」

日本は、19世紀末の江戸時代までは、世界の大陸での生死をかけた生き残り戦争を回避できた稀有な島国であった。その為、宗教という概念はなじまず、自然の恵みや驚異に対する感謝や畏怖の心をもつ大切さが神道によって伝承されてきただけである。また、宗教的な正しさが抽象的な分、具体的な正しさを表す道徳感、倫理感、遵法感が高度に醸成されてきたのだと考えられる。

20世紀になり世界の争いに巻き込まれ、新たな宗教とも言えるイデオロギーと呼ばれる「国際主義」や「経済合理主義」を正しいものとして信じこませる「教育」が行われてきた。戦後70年を経た今、自分自身の意思で何が正しいのかを「学ぶ」ことが必要であると、少なからずの日本人は気が付き始めている。

4. 日本の文化と秩序

日本人は、人の為に働くことを通して、より安寧な社会をつくる文化を継承してきた。高度なものづくり技術やおもてなしの心は、この伝統的な文化により支えられている。

欧米のイデオロギーは、戦いに勝つには有利であるかも知れないが、普遍的な文化になるまでには数百年の時が必要であると思われる。よって、イデオロギーの本質を疑いつつ、「和を以て貴しと為す」という成熟した日本文化を背景とした秩序を模索することが肝要であるのではないのでしょうか。